

爲加増分二百石令扶助訖。全可知行之狀如件。

慶長六年十月九日

但馬長知判

岩田傳左衛門殿

按するに、右慶長六年の十月に至り、太田但馬守長知より二百石加恩せしは、前年淺井繩手にての戦功を賞せしものなるべし。さて夫れより慶長十二年まで太田但馬守が家士なりしかど、十二年に井上勘左衛門・大野甚之丞と共に藩士に召抱えられ、各千石宛賜はりたり。可觀小説に云ふ。岩田傳左衛門祖父岩田傳左衛門知行千石拜領之處、立退きたり。淺井吸鎗之功を被賞て、丹羽の家來成田助九郎以下の者ども、皆夫れく高知に被召出候事左も可有之事也。此の方より罷出でたる者ども水越縫殿を初め働さける者共へ、少くとも一倍の加増は可被下候處に、于今左様の儀なし。結句敵方の者ども高知に罷成候ては面白からぬ事ども也とて、立退候よしを申て上方へ参けり。其後年を経て立歸り、他國にても宜しき事も無之に付、歸りたりとのよし申立候得者、また先知の如く千石被下たりといふ事を記載す。三州志難繼餘考に、岩田傳左衛門は、太田但馬守の家士也。但

馬守切替せらるゝ後、慶長十二年井上・大野と共に藩士に召出され、千石を賜はり、浪華合戦の後五百石を加俸ありて、元和三年浪士となり、正保二年陽廣公へ復任し、元祿中千五百石をば賜はりたり。可觀小説に、岩田傳左衛門乞骸の説を載せられたれど詳かならず。今彼の家譜に従ふとあり。平次按するに、元和三年に浪士と成りたる時の事にて、他國にて宜しき事もなきとて立歸り再勤せしは、正保二年復仕の事をいへるものによ。可觀小説の傳話の始末ならば、前顯なる邸宅怪異の傳話は、後人の俗説ならんか。

○味噲藏町

舊傳に云ふ。昔軍備貯用の味噲藏をば此の地に建て置かれけり。故に味噲藏町と呼べりと。按するに、元祿六年の土帳に、御普請會所向みそぐら町、或は味噲藏町黒梅屋橋など見たり。

○味噲藏跡

淺香友郷の武家耳底記に云ふ。黃門利常卿の時味噲藏あり。今の奥村市右衛門第地是也。故に其邊を味噲藏町と云ふ。或時味噲藏の前に白き犬一疋、首の際に手負ひて伏居た

り。人も餘り知らざるに、利常卿仰せらるは、味噲藏の前に犬手負ひて有りと聞きたり。若き者共見て参れと宜ふ。近習の何某参りて其通り申上るに被問召借々悪き番人め哉、夜中の番はケ様の事を知るべき筈なるに、犬の切らるゝも知らざるは、能く寝たるゆゑなり。汝参て犬の切られたる寸程、番人の足輕めを伐てこよと仰せらる。近習の士長て参り、番人の足輕を呼び出し、犬の疵程伐たりける。此沙汰高く成、其頃金澤中の夜番人共夜々寝ずして、各大事に勤めけると也。平次按するに、右番人は味噲藏の番人なるべし。館紺屋傳書に、慶長十九年の頃越中高岡より歸りけるに、紺屋坂の舊宅地既に御用地と成に付、味噲藏町の味噲部屋に暫く置せらるとあり。三州志に、味噲部屋ありしは慶長・元和の頃なりといへり。又今新堅町土藏御坊の傳話に、昔味噲藏町の味噲藏を廢せられし時、其藏竈却相成、其頃右古木を買入、御堂を建てたり。故に土藏御坊と于今俗稱すといひ傳へたりとぞ。按するに、寛永十四年三月十八日堂形雜穀藏納の定書に、二拾石御膳味噲用河北郡上大豆、百石御臺所味噲用新潟中大豆といふ事見ゆ。

此の時代は既に軍用の味噲の製造は止められしにや。世にいふ名隠屋味噲は、尾州名隠屋藩徳川家の軍備貯用の味噲にて、古き分をば追々取拂はれし故に、世上へ賣却して、茶人など會席料理の用に宛て賞味す。そのかみ金澤にも軍備貯用の味噲製造を命ぜられし頃は、名隠屋藩の如くなりしとおぼゆ。

○千宗室番邸

元祿六年の土帳に、千宗室居宅味噲藏町稻荷橋近所とあり。延寶の金澤圖を見るに、稻荷橋の下加須屋傳兵衛が居邸と野村六左衛門が居邸との間なる邸地を千宗室と載す。按するに、利常卿小松在城の頃は、城内三・丸に居邸を賜はり居住せしかど、萬治元年薨去ありて、翌二年に小松附の諸士悉く金澤へ移住を命ぜらる時、宗室も金澤へ來り、味噲藏町にて邸地を賜はりたるなるべし。

○千宗室傳

燕窩風雅臨田九兵衛直能傳に云ふ。直能學茶式於千宗室。而白眉其間。宗室之來本藩在寛永三年。時僧玄機峰送千氏宗室居士之加州行五絶。宗室老居士。於茶大悟人。間諱